

ささえあう

2012年
4月30日
第16号

事務局 大分市大字森679-6 リフォーム夢舎内 TEL・FAX097-527-5443

大分精神障害者就労推進ネットワークの皆さん、そして関係者の皆さん、新しい年度を迎えられますますご活躍のことと思います。

私事になりますが、3月に別府大学を退職し、今年度から熊本市にある九州ルーテル学院大学人文学部心理臨床学科に移動しました。とはいえ、別府出身で両親をはじめ家族が住む大分を離れられずに、不慣れな単身赴任生活を送っています。身の回りのことを一人で全部やらなければならない大変さ、炊事洗濯から分別し

などでの地区フォーラムの開催に取り組んできました。また、オンブズマンとしての機能も果たしてきたと自負しています。

しかし、取り組めば取り組むほどに多くの課題がみえてきたことも事実です。それは、心の病がある人の生活をどう支え、問題を抱えている当事者が、家族が孤立しないような地域ネットを作り上げていくといった課題です。

心の病がある人も、その人に働きたいという意思があれば、その人その人の多様性に合わせ

会員の皆様へのメッセージ

当事者・家族が孤立しない地域ネットを

大分精神障害者就労推進ネットワーク副代表

九州ルーテル学院大学人文学部心理臨床学科 三城 大介

たゴミをいつ出せばいいのかまで日々悪戦苦闘しています。自立し一人暮らしを始める当事者の方たちも「こんな風に戸惑うんだろう」と想像しながらの毎日です。

今回の移動は、個人的な理由からですが、この精神障害者就労推進ネットワークへの関わり方を変えるつもりはありません。毎週、熊本と別府の往復を続ける生活ですが、このネットの活動だけはなにがあっても続けたいと思っています。それは、私の中にネットワークに対する課題が残っていると感じているからです。

この活動には、立ち上げ準備から参加して6年が経ちました。その間、県内の当事者の方や心の病のある方の生活にかかわる調査や研究、就労支援に取り組んでいる機関や施設への情報提供、就労支援モデルの提案、小地域ネットワークに取り組んでいる市町村や団体への支援、心の病のある方の生活や就労などに関わるマニュアルの作成と配布、大分市や竹田市、国東市

で、その人の持っている能力や適性に合わせて支援してゆくことのあり方が、少しずつ広まりつつあります。また、その支援が無いと働くことや生活の継続が難しいことも明らかになっていますし、働きたいという意思があっても、生活や仕事の上で問題を抱えていても、どこにどんなふうに相談すればいいかわからずに悩んでいる人がたくさんいることもわかってきました。それに、民生委員など、地域で直接的に当事者を支える役割を担っている人の中にも、どこにどう連携をつなげて支援をすればいいか困惑している人もいます。

県内のそれぞれの地域の社会資源や地域連携の状況に合わせた、風通しが良く当事者にとって利便性の高いネットワークの構築と、当事者が必要とする支援のあり方を、今後もこの大分精神障害者就労推進ネットワークの活動を通じて研究してゆきたいと思っています。どうぞ今後ともよろしくお願いいたします。

九州・沖縄地区精神保健福祉士協会合同研修会

ネットワーク活動に注目!!

別府大学で開催 ― 就労支援の多様化を学習

2月25日、別府大学のメディア教育センターで九州・沖縄地区精神保健福祉士協会合同研修会が行われました。

九州各地から、病院や地域で精神障がい者の支援に専門的に携わる約100人の精神保健福祉士が参加。研修会では、「こうすればできる！精神障がい者の就業支援」をテーマに倉知延章・九州産業大学教授が講演。また大分精神障害者就労推進ネットワークの6年間の取り組みについて、三城大介・別府大学准教授(現九州ルーテル学院大学教授)と白石一徳・精神保健福祉士が報告しました。



「働けない!？」から「どう支援するか」へ

倉知教授は「諸外国では働いているような人が、日本では今でも働けないとされている」と指摘。その理由として、社会の偏見、医療・福祉関係者の理解不足をあげ、「重要なのは『働けるか、働けないか』ではなく、『どう支援すれば働けるか』だ」と指摘しました。

その上で、「精神障がいは多様化しており、支援も多様化している」として、統合失調症やうつ病、発達障がい、引きこもり、てんかん、高次脳機能障がいなど、障がいに応じた支援の基本的な考え方を説明しました。また、質問に答えて「医療の役割は大きい。精神保健福祉士が病院から地域に出て行って、発信し、つながりを作っていくことが重要だ」と話しました。

事業所の枠を超えるネットワークの意義大きい

三城准教授は大分におけるネットワークの地域活動を紹介し、「地域で行政や施設の枠を超えてつながるネットワークの存在意義は大きい」と指摘しました。そして、「福祉・医療のネットワークが地域のネットワーク(自治会・民生委員等)とつながって情報交換し連携していくことが重要だ」として、その中心的な役割を果たすのは地域全体の社会資源を把握し活用できるワーカー(ジェネラリスト・ソーシャルワーカー等)であり、ニュージーランドでは“フィールドオフィサー”として重要な役割を果たしていると紹介。「立場を突き抜けて動ける人を中心にまずやってみることだ」と積極的な行動を呼びかけました。

地域のニーズに応えることで理解進む

白石精神保健福祉士は「高齢化や買い物の不便さなど地域のニーズをつかんで、必要に応える取り組みをすることで、当事者もやりがいを感じ、また地域の精神障がい者に対する理解が進んできた」と地域のニーズと精神障がいの当事者を結びつけることの重要性を指摘しました。

九州各県からの参加者からは、地域とつながって取り組みを進めるネットワークの存在を評価する声が聞かれました。

「この10年で大きく変わった医療」

“心の病を考える大分地域学習会”に参加して

毎年、家族会によって開かれている“心の病を考える大分地域学習会”が10月21日、大分市のコンパルホールで開かれました。約250人が参加し、講演や体験発表などが行われました。

体験発表は、大分市の障害福祉サービス事業所「つわぶき園」の4名。地元でとれた素材を使い、手作りで砂糖などもまったく使わない弁当を作って配達する仕事に込めた気持ちと働く様子が報告されました。講演は「偏見と人権」、「最新の精神科医療と生活支援」、「治療的デイケアの取り組み」でした。医療とデイケアのお話は特に重要な内容だったと思いますので報告させていただきます。

真の社会復帰めざす医療に—山本病院・山本院長とスタッフのお話

「最新の精神科医療と生活支援」について、別府市の山本病院の山本隆正院長が講演しました。

「この10年余りで精神科医療は劇的に変わっている」と指摘し、具体的には「うつ病と認知症が大幅に増えた。入院日数も短くなった。統合失調症は全体の数は変わらないが、破瓜型と緊張型が減り、妄想型と分裂感情病型が増えている」と話しました。

そして、山本病院の医療について「急性期病棟を持ち、大前提として3ヶ月で退院する急性期治療を行っている。治療の標準化を進め、ケアプランに基づいた治療を行っている」と紹介。クスリによる治療の経過については、「クスリで症状が治まってくると臨界期になり、副作用が出てくるが、それはクスリを減らせる時期であり、いかにクスリを減らすかが重要だ。クスリには定型抗精神病薬と非定型抗精神病薬があり、最近の非定型抗精神病薬は副作用が少なくなっている」と説明。また「クスリだけでなく、精神療法、リハビリ療法も活用されることが増えている」と話しました。

統合失調症は慢性化することも多くあるが、最近は改善が見込めない人はほとんどいない。しかし、完全寛解ではなく部分寛解が多い。社会復帰も支援プログラムを作って、技能訓練（作業療法）、自立訓練（SST等）、服薬教育などに取り組んでいる。デイケアも重視している。最近の精神科医療は、「マンパワーの増加、医師中心からチーム医療へ、症状中心から患者理解へ、入院治療から外来治療へ、真の社会復帰をめざす」という流れになってきている。山本病院でも作業療法士が10名、精神保健福祉士が7、8名、臨床心理士が3名いて、多職種のチーム医療を行っている」と話し、「これからは、チーム医療でのきめ細やかな対応に加えて、多彩なプログラムから、個々の目標に向かって選択できるオーダーメイド医療が求められている」と指摘しました。

就労支援プログラムが四種—ジョブクラブ・個人プレ喫茶・集団プレ喫茶・喫茶就労

山本病院の「治療的デイケアの取り組み」については南加保里看護師が報告。プログラムは35種類あり、いつでも参加自由なオープンプログラムから、3ヶ月以上継続参加が必要なクローズドプログラムまで3段階に分類している。就労支援はクローズドプログラムとして、ジョブクラブ、個人プレ喫茶、集団プレ喫茶、喫茶就労の4種類の取り組みを行っている。ジョブクラブでは、就労を考えているメンバーを対象に、就労に対する準備や心構えなどをってもらい、就労に対する不安の軽減などを図り、グループワークで協調性や社会性の向上をめざす。個人プレ喫茶は、就労の導入部分で、身だしなみや言葉づかい、接客訓練などの知識やスキルを習得し、ロールプレイを行いながらステップアップを図る。集団プレ就労では、実際に喫茶就労しているメンバーと一緒に本番さながらの訓練を行う。喫茶就労では、院内の喫茶店での実務を通して衛生・会計・調理法などの作業学習を行い、就労に必要な身体能力の向上・維持を図る。その後はハローワークや障害者職業センターと連携して、就労支援を行う」というお話でした。（文責・編集部）

「星のかけら」

大分すみれ会発行

“心の病をもつ当事者・家族・支援者の思い”

「大分すみれ会」は心の病の人たちと家族を支援する大分市の家族会です。昨年11月に「星のかけら」を発行しました。精神障がいの当事者、家族の率直な思い、また医師のアドバイス、医療的な知識などが掲載されています。その一部を紹介させていただきます。



はじめに

心の病の人が、増え続けています。大分市でも1万4千人超の人が罹患しています。罹患した当事者の苦しみは大変なものです。当事者に関わる家族の対応も重大、並大抵ではありません。多大なエネルギーを費やします。(中略)この文集が、心の病や障がいのこと、或いは障がい当事者に対する接し方等について、ご理解いただく一助になれば幸いです。

「大分すみれ会」福島益夫会長

「もう一度社会に出て一生懸命働きたい」 — 当事者として

私はこの病気になる前に、某企業で一生懸命働いていました。しかし人間関係に躓き、1年4ヵ月で会社を辞めて別の会社に就職しましたが、上司とうまくいかず、この会社も2ヵ月で辞めました。何故仕事が続かなかったのか、今でも疑問に思っています。自分に、仕事に対しての内容と理解力がなかったから、続けられなかったのかもしれませんが。もしこの病気になって居なかったら、長く会社に勤めていたのかもしれませんが。結婚もして子どもも居たかもしれません。(中略)今は昔のことなど忘れて、もう一度社会に出て一生懸命働きたいです。その為にも病気が再発しないように、毎日薬を服用して、病院の先生の言うことを聞くことが大切です。私もこの病気と長く付き合っていきたいです。私の今後の目標は、独りで生活していくことです。

「医療の進歩と支援の充実で働けるように」 — 家族として

子どもはいろいろな仕事をしてきましたが、人間関係等のストレスにより、一、二年で辞めることが続きました。今回病院から、障害者手帳を利用してはとすすめられ、初めて病気をオープンにして大手の会社に入社できました。外見は普通に仕事をするので、理解して頂くまでに時間がかかりました。2度、3度と挫折しながらも三年を過ぎることができ、職場でも少しずつ理解されるようになってきています。現在では医療が進歩し、支援機関も充実してきて、相談するスタッフの方も多くなっています。仕事を続けていけるのもスタッフの方々のおかげだと心より感謝しております。

「変わらない世間の目—実態を知ってほしい」 — 家族として

治療では新薬が次々に発売され、デイケアも充実してきましたし、精神保健福祉士という専門職の方を病院、福祉事業所、就労の場にお見かけするようになり、回復される方も多く見かけるようになりました。もう不治の病ではないのかも知れません。なのに、家族や当事者を取り巻く世間の目はあまり変わっていないように思います。治療の面、福祉の面で進んできている実態を知ってほしいと思います。

精神障害者雇用管理セミナー(3月11日・大分市)の報告 定着にも重要な“マッチング”

職場環境プラス医療・生活のフォロー体制も

3月1日、大分市のトキハ会館5階「ローズの間」で開かれました。ダイキンサンライズ摂津から「当社の精神障害者雇用の取組」について、また大分障害者職業センター村上さん（ネットワーク理事）から「精神障害者の雇用促進等定着に向けた取組」の報告、三菱太陽商事の報告などが行われました。

村上さんは、大分県下の就労支援機関の変化として「『就職』だけが目標ではなく、『定着』を目標とした就労支援に変わってきてい

る。そのためには、定着のためのマッチングを意識した取り組みが必要」と指摘。仕事のマッチングだけでなく、職場環境（職場の環境・理解等）とのマッチング、フォロー体制（医療面・生活面のフォロー等）のマッチングも重要だと指摘しました。

また組織の垣根を越えた大分県下独自の就労ネットワーク形成として就労推進ネットワークの取り組みを紹介しました。

働き続けるために…ジョブコーチ支援の活用を

職場に出向いて支援します

ジョブコーチ支援とは、障がい者が働いている事業所にジョブコーチが出向き、障がい者が職場に定着できるよう、直接的・専門的に行う支援です。

ジョブコーチは、障がい者に対して、職場内容の理解や作業遂行能力の向上に関する支援、職場での人間関係や職場内のコミュニケーションに関する支援に加え、事業主に対しても、障がい者の職場適応に関する助言を行うとともに、必要に応じて職務や職場環境の改善を提案し、事業所内の支援体制についても助言します。また、家族や関係機関に対しても、職業生活を支えるための働きかけを行います。

職場、関係機関、家族に働きかけ

ジョブコーチ支援の流れは図1のとおりです。実施にあたって、職業センターは、事前に対象者や事業主、関係機関などと相談を行い、支援の具体的な内容や支援期間を設定し、一人ひとり個別に支援計画を作成します。標準的な支援期間は2～4ヵ月程度で、終了後も必要に応じてフォローアップを行います。（図1参照）

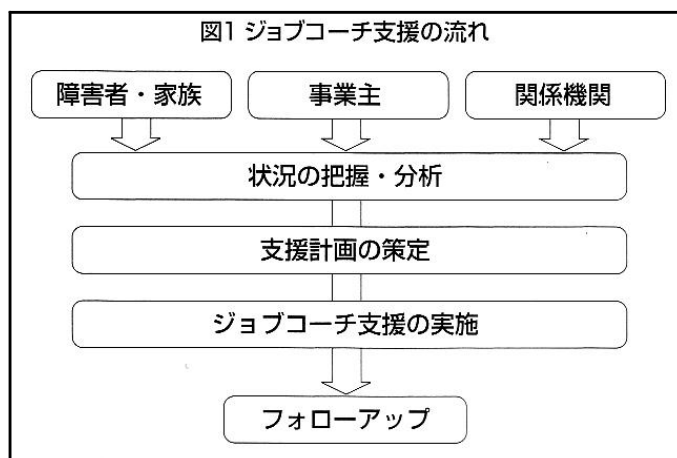
就職前後だけでなく、就職後一定期間を経過した在職中の方も、職場適応などに課題が生じた場合などに支援を受けることができます。

なお、地域障害者職業センターは、障がいの種類、障害者手帳の有無に関わらず、障がい者や事業主の利用が可能です。

問合せ先 大分障害者職業センター

別府市上野口町3088の170

TEL 0977-25-9035



「福祉施設と地域のかかわりを考える」

大分大学福祉フォーラム（3月3日・大分市）

“当事者研究”で困難解消

3月3日、「福祉施設と地域のかかわりを考える」をテーマに、大分市の平和市民公園能楽堂で第15回大分大学福祉フォーラムが開かれました。北海道浦河町の「べてるの家」と福島県泉崎村の「こころん」の報告を中心に、地域と福祉の関わり方について興味深い意見交換が行われました。

向谷地さんは、統合失調症をはじめとする精神障がいがある人たち4人とともに、「自分におきていることを自分たちで発見し、対応していく」という“当事者研究”の成果を伝えてくれました。「悲壮感ため込み暴発型何でもコピーしゃべくりミュージシャン型」という自己診断の高松さんが、自作の歌でべてるの家を紹介。「目の前に昔の苦労がよみがえるタイプ」の山根さんが、自動車メーカーに勤務していた当時のいじめをきっかけに統合失調症を発病して失職、べてるの家に来て自分の幻聴をICレコーダーで確認しながら、仲間とともに受けとめていった過程を話しました。また、幻聴の有効活用をめざす亀井さんは、私たちの前で通所途中に幻聴が「帰ろう」とささやく場面を再現。仲間に相談しながら困難を解消してきたことを話しました。



「まちづくりも一緒に考える」

向谷地さんは、「過疎化で産業が衰退しているなか、べてるの家の人たちは町づくりを一緒に考えてきた。一人ひとりには色んな苦労がたくさん詰まっていて、地域がその人たちに学ぶことがたくさんある。べてるの家は『三度の飯よりミーティング』を合い言葉に、自分たちを客観視して『失敗しても大丈夫』と言えるようになってきた。地震や津波も経験したが、防災訓練を通して地域とのつながりができた。専門家だけでなく、地域の人と一緒に取り組むことで困難を解消できている」と話しました。当事者主体の取り組みを重視する視点が伝わってきました。

地域と福祉や行政の積極的関わりが重要

大分大学福祉科学研究センター教授の椋野美智子さんは、大分県内で行った『福祉のまちおこし調査研究』について報告。中心市街地、郊外住宅団地、農山村地域はそれぞれに高齢化や過疎化などの課題を抱えており、地域と福祉事業所や行政などの積極的な関わりが重要になっていることを、調査結果から具体的に指摘しました。そして、社会福祉施設の側が「地域を助ける」という視点を持って、外部の団体や関係機関との連携・ネットワークを密にしながら「地域側のプラス」を志向する活動の重要性を指摘しました。

国東フォーラムin安岐

精神障がいがある人とみんなのために

このフォーラムは、“心の病”がある人も「理解と支援があれば地域で暮らし、働くことができる」ことを地域の人たちにも知っていただきたい願って開催されます。大分就労推進ネットワークも開催に協力しています。地域で理解を深めるための取り組みの一環です。ぜひご参加ください。

日時 5月19日(土) 午前9時開場

午前9時30分 フォーラム開会 鈴鳴荘（12時30分まで）

12時40分 作業見学 三角ベース

入場無料

会場 国東市安岐町下山口 鈴鳴荘・三角ベース

●講演 — 「障害者福祉・地域福祉から地域振興へ」

～誰もが担い手になって取り組もう～

講師 長野敏宏・愛媛県愛南町御荘病院院長・NPO法人ハートinハートなんぐん市場理事

講師の長野敏宏さんは、愛媛県愛南町にある御荘病院の院長として、心の病気の人たちの治療に携わり、地域の人たちと協力して働く場、地域を活性化する事業を進めてきました。病気や障がいの壁を越えていろんな取り組みが広がり、高齢化する地域の活性化に結びついています。そのもとにあるのは“住民ネットワーク”。「あらゆる地域住民が、自分たちの住む地域のために」という思いが、地域づくりに結びついています。

●ハンドベル演奏 —三角ベース音楽クラブ

●意見交換「ともに生きる とともに働く」 — いま思うこと 伝えたいこと

福祉事業所で働く人・看護大学生・地域づくりに取り組む人たちの思い

▲午前の部終了後は、三角ベースにお茶・クッキーなどを準備します。仕事(パン・竹林等)を見学し、ゆっくりお話しをしませんか?—「販売コーナー」も開設します。

主催 精神障がい者国東フォーラム実行委員会

後援 国東市・国東市教育委員会・大分県東部保健所国東保健部・国東市民病院・大分障害者職業センター・ハローワーク別府・国東市社会福祉協議会・国東市障がい者自立支援協議会・国東障がい者福祉団体連絡協議会・国東市区長会・国東市民生委員児童委員連合会・国東市商工会・国東市身体障害者福祉協議会・くにさき手をつなぐ親の会・国東精神障がい者福祉会・国東市ボランティア連絡協議会・国東市介護支援専門員協議会・社会福祉法人秀溪会・社会福祉法人共生荘・NPO法人輝くピアホーム・NPO法人みずき・社会福祉法人安岐の郷・別府法人会安岐支部・NPO法人おくすり研究会・大分精神障害者就労推進ネットワーク・在宅障害者支援ネットワーク 他

連絡先 国東市福祉事務所内 国東フォーラム実行委員会事務局 電話 0978-72-5164

「三角ベース」 電話 0978-64-7533

第7回 大分精神障害者就労推進ネットワーク 総会

大分精神障害者就労推進ネットワークの活動も6年を重ねました。

昨年度は「地域連携」の拡大充実を中心的な目標として取り組んできましたが、様々な課題が浮かび上がってきました。「地域連携」は、地域でつらい思いを持ちながら暮らしている人たちを支援し、就労への道を広げ、安心して暮らせる地域にしていくための方法です。私たちは、当事者・家族が孤立することのないよう、①当事者・家族と支援者、そして行政の連携②これまで個別に支援してきた支援機関・事業者間の連携③医療を含んだ連携一をめざしています。

第7回総会では、その実現のための取り組みを話し合い、決定します。また、記念行事として地域の取り組みの報告も行います。ぜひご参加ください。

(1) 日程 6月16日(土) 13時30分～16時

(2) 会場 アイネス大分県消費生活・男女共同参画プラザ 2階大会議室

大分市東春日町1番1号

(3) 内容

(1) 第7回定期総会

(2) 総会記念行事記念行事 「“地域連携”の可能性」

・「働きたい」をコーディネート

— L.L.C.ハートブリッジの4年間

・地域で家族ぐるみ支援

— 訪問看護センターりぼんの試み

・“地域連携”の可能性

— 連携広げる城東包括支援センター

編集後記

4月14日に別府大学で行われた第5回理事会では、京都のてんかん患者による事故について、「てんかん患者は免許が取れなくて就労ができないという人がたくさんいる。働けないために親がかりの生活をしている若者が多く、てんかんを隠して免許を取り、病気を隠して就労することもある。今度の事故の問題にどう対応すればいいかわからない」、「大分でもこの事故の後に仕事を辞めて引きこもった若者がいる」、「病気を告知した時に、配置換えならいいが実際には『いらない』となるので告知できない」という声が出されました。簡単に答えが出る問題ではないと思います。しかし、こんな現実が早くみんなの問題になり、解決の道筋をつけることができれば、悲惨な事故を防げるかも知れないと思われました●また、この理事会では、実際に大分県内で就労支援を行った成果や課題の報告が多く出されました。「年間で7名就労」、「施設で7名（うち精神2名）雇用。介護職は向いている」、「2年間で一般就労が7名」、「10年で10名就労し続けているのが3名」、「2年前から就労支援に取り組み見学などできっかけづくりをしている」などの例から、地域で心を込めて取り組みをしている人たちがいることが伝わってきました●地域全体を視野に入れた取り組みとして、「市の社協と連携して地域学習会に取り組んでいる」、「認知症支援には“熊本モデル”があるが、“大分モデル”についてディスカッションしている。専門医と小地域の医療連携、自治委員・民生委員等と連携した地域サロン等のシステムづくり、住民アンケートを活用して住民自身のエンパワメントを進めるなどの取り組みを考えている」など、地域のあり方自体を変えていくような取り組みの報告もありました。こんな声を一人でも多くの人と共有したいと思います。ネットワークにはそんな役割もあると実感しています（〇）